



大手企業・ベンチャー・学生・メンター
参加者は何を学び合い、
仕掛けたのか

地球貢献型リーダーズ

新たな発想を生み出す
ルール・制約があるから面白い！

株式会社商船三井/株式会社カタフリ 住田 勇武氏 他

L-UNIV.人材開発論

異なるものに橋をかけ、
新たな価値を生み出す
「ブリッジコミュニケーション」

特別対談

新しい学びをつくるラーニングクリエイターを
「まちづくり」のフィールドで育てる

東武不動産株式会社
代表取締役社長

田中 浩 氏



株式会社リバネス
教育総合研究センター長

前田 里美



リバネスユニバーシティー
2023年後期開講コース
受講者募集中！

多様な学びとキャリアをつくる

「リバネス奨学金」プログラム始動！

学生とともに企業内のアントレプレナーシップを醸成する

L-UNIV. Magazine vol.01

■ リバネスユニバーシティとは

- 03 リバネスユニバーシティ設立の思い
- 04 アセットをフル活用し、プロジェクトを生み出す「カレッジ」

■ 地球貢献型リーダーズ

- 06 新たな発想を生み出すルール・制約があるから面白い！
株式会社商船三井 / 株式会社カタフリ 住田 勇武氏
- 08 異分野の仲間と「地球の優しさをアップデートする」
株式会社イヴケア 五十棲 計氏
- 09 ブレーキを踏まずに行動した先に、最高に面白い世界があった
山梨大学大学院 村山 拳午氏
- 10 これまでの方法が通用しない環境でビジネスの原点を学び直す
守山乳業株式会社 橋本 浩氏

■ L-UNIV. 人材開発論～誰もがコトを起こすリーダーになれる

- 11 異なるものに橋をかけ、新たな価値を生み出す「ブリッジコミュニケーション」

■ 特別対談

- 12 新しい学びをつくるラーニングクリエイターを「まちづくり」のフィールドで育てる
東武不動産株式会社 代表取締役社長 田中 浩氏
株式会社リバネス 教育総合研究センター長 前田 里美

■ リバネスユニバーシティのコース

- 16 リバネスユニバーシティ2023年度後期開講コース受講者募集中！
- 18 コース一覧

■ 参加のヒント

- 20 手上げ制研修の対象にして「本気の人」を送り出す
株式会社丸井グループ 大竹 桃子氏

■ 多様な学びとキャリアをつくる

- 21 「リバネス奨学金」プログラム始動！
学生とともに企業内のアントレプレナーシップを醸成する

L-UNIV. Magazine 編集部

編集長 楠 晴奈
編集 篠澤 裕介、前田 里美、望月 史子
記者 環野 真理子、重永 美由希、
立花 智子
発行人 丸 幸弘
発行元 リバネス出版(株式会社リバネス)
東京都新宿区下宮比町1番4号
飯田橋御幸ビル5階
TEL:03-5227-4198
FAX:03-5227-4199

表紙・DTP 高杉昭吾デザイン事務所



リバネスユニバーシティ 設立の思い

環境破壊、気候変動、あるいは経済格差など、世界には大規模かつ複雑な課題が山積しています。それらの原因をシンプルに表現することはできません。しかし、いずれの課題においても共通する要素が一つあります。それは「バランスが崩れている」ということです。つまり、いかにして「調和」を実現するかが、解決の鍵となります。

調和を実現するための「正解」はまだわかりません。しかし、「異なるもの同士の分断をなくすこと」がこれからの時代において非常に重要なスタンスになるはずです。「会社のために」「業界のために」「地域のために」といった分断した視点から一旦距離を置き、あるいは「人類のために」という視点すら超えて、「地球のために」という極めて広い視野で物事を考える必要があるのです。

そうした概念を習得し、広い視野を備えた地球貢献型リーダーを育成すること。それがリバネスユニバーシティの最終的な目的です。

2021年のリバネスユニバーシティの設立に当たり、私達が最初に手掛けたのは「地球のために」という視点で、人材育成の場をつくることです。それは、「個人の成長のため」「会社の成長のため」といった閉じた育成ではなく、答えを知っている先生がいるわけでもなく、これからの地球に必要な人材について考えながら組織も業界も年代も関係なくオープンに学び合う場です。

そして、各コースで助成金の仕組みが立ち上がり、この学びの場に参加したスタッフ・受講生たちによる、ベンチャー設立や組織の新規事業創出という枠組みに囚われない、「創業」へのチャレンジが始まっています。

「分断をなくす」ことは多様性をなくすことではありません。むしろその逆であると私達は考えています。全く異なる価値観、思考、専門性を持った人同士が熱を持ってぶつかり合い、化学反応が起こる。それによって新しい化合物が生まれエントロピーが増大するのではないのでしょうか。それこそが、大規模で複雑な課題を解決する突破口になるはずです。

こうした思いから、リバネスユニバーシティは次なる挑戦として、「多様な学びとキャリアをつくる」奨学金の制度を立ち上げました。

リバネスユニバーシティは「人の変化・成長」を通じて科学技術の発展と地球貢献を実現する方法を模索し、自ら新しいプロジェクトを仕掛けていきます。

この壮大な「実践場」への参加を、お待ちしております。

アセットをフル活用し、 プロジェクトを生み出す 「カレッジ」

Leave a Nest COLLEGE

[Webサイト] <https://univ.lne.st/>



リバネスカレッジ

主催 株式会社リバネス

ミッション

ブリッジコミュニケーションとQPMIサイクルを実践し、
個の熱を起点としたプロジェクトを生み出す

設立の思い

リバネスは、ビジネスのわからない学生が集まった学生ベンチャーでした。それがどうして仕事を作ることができたのか？それはたとえビジネスがわからなくとも新しいことに挑戦し、儲け話ではなく“課題”を見つけたからでした。発足当時、理科離れやポストク問題、アントレプレナー不足は深刻でした。最初の一步として始めたのが、子どもたちに研究の魅力を伝える出前実験教室の事業化です。すると、周りは私達を止めるのです。色々なできない理由を並べてアントレプレナーシップの芽を摘む人がほとんどでした。これが私の原体験です。

リバネスの理念は「科学技術の発展と地球貢献を実現する」で

す。設立から20年、科学技術の発展は少しずつ実現してきましたが、後半の“地球貢献”がまだまだ道半ばです。新型コロナや海洋プラスチック問題のように、地球規模で取沙汰される問題に対して、解決策を作るリーダーをもっと育てなければいけないと考えています。それには解決したい「課題」を見つけ、とにかくすぐできることをやる、すぐに現場に飛び込み、まず試してみる。そして“世の中がちょっと動いた”という成功体験を得る。そんな場がもっと必要なのです。リバネスカレッジはそのために必要な「ブリッジコミュニケーション」と「QPMIサイクル」を徹底的に実践しながら学ぶ場です。

(リバネスグループ代表取締役CEO 丸 幸弘 2021年5月0期生キックオフ講演より)

3つの特徴

ブリッジコミュニケーション

未知の相手と共感をつくり、強固な関係性を構築してコラボレーションできるテーマを生み出す方法を徹底的に学び、実践します。

QPMIサイクル

QPMIサイクルはQuestion、Passion、Mission、Innovationの頭文字を取ったものです。個が挑みたい「問い」と行動し続けるエンジンとなる「熱」を掘り下げます。

プロジェクト創出

リバネスが持つ研究者やベンチャーのネットワークや独自で仕掛けるプロジェクトもフル活用し、1分野、1組織では実現不可能な長期的なプロジェクトテーマを構想します。

実施コース (2023年6月現在)

ブリッジコミュニケーションコース / QPMIコース / ラーニングクリエイターコース (協賛: 東武不動産株式会社)

2022年度に生まれたプロジェクト

- かおりQOLプロジェクト
- 「もしもスクール」プロジェクト
- 楽しさと健康を可視化することで新たな食卓をつくりだす
- 宇宙基地をみんなが快適な場所にしよう!
- 高校生と企業を繋ぐ共創給食プロジェクト
- 休業者酪農セラピープログラム
- 誰も頑張らなくていい健康的な食生活
- 生体物質のメロディー
- 個性を活かすインクルーシブな社会
- Indoor AI-based Cannabis Cultivation
- Post-lunch Sleepiness monitoring system
- GutCareProduct
- Planekko System
- Provide an opportunity for a casual dental health checkup
- Smoothy

地球貢献型リーダーは画一的な人材ではなく、一定の分野・業界・世代に限らない多様性が必要だと私達は考えています。そのため、リバネスユニバーシティでは多様な考え方・専門性・アセットを持った企業や大学とともに多様な育成の場をつくることを目指し、「カレッジ」を主体としたプログラム開発を行っています。受講生とともに主催企業が持つアセットをフル活用し、地球貢献に資するビジネスやプロジェクトを生み出していくことが各カレッジのミッションです。現在は株式会社リバネスが主催する「リバネスカレッジ」、東日本旅客鉄道株式会社が主催する「JRE Stationカレッジ」の2カレッジが動いており、今後も新たなカレッジを設立してまいります。

[Webサイト] <https://jre-station-college.jp/>



JRE STATION カレッジ

JRE Station カレッジ

主催

東日本旅客鉄道株式会社

ミッション

異業種・異分野の社会人が駅に集い、
サステナブルビジネスをつくりだす

設立の思い

これからの日本が世界をリードしていくためには、やはり「世のため人のため」をしっかりとやり続けることが大切だと私は感じています。そうした中で、JR東日本としても、どうすれば持続可能な社会の実現に向けて役に立つことができるだろうかということを考えて企画したのが、今回のJRE Stationカレッジです。JRE Stationカレッジは、地域の拠点である駅をキャンパスとして、課題発掘型のリーダー人材を育成し、サステナブルビジネスを生み出すための学び場です。年齢、業種、立場を超えて、誰もが知識をアップデートし続け、課題意識と情熱でつながる人財のネットワークを増幅させ、地域の課題を持続可能な形で解決するエコシステムの構築を目指します。JRE Stationカレッジは東京駅キャンパスからスタートします。

東京駅は、当時の人々の「世界に誇れる駅をつくるんだ」という高い志と多大な努力によって、1914年に創建されました。その記録を読みますと、身震いするような感動を覚えます。まさに今こそ、我々自身も、次の100年後の人々にそのように感じてもらえるような仕事をしていく必要があります。その象徴的な存在である東京駅をキャンパスとして、次の100年、200年先の未来につながるサステナブルなビジネスをクリエイティブにしていきたいと思っています。

(JR東日本 常務執行役員 表 輝幸氏 2021年10月エコテックコース初回講義より)

3つの特徴

駅

地域の拠点である駅をキャンパスとして、多種多様なバックグラウンドをもつ個人のネットワークを形成し、わずか4カ月で新たなビジネスの種をつくりだします。

サステナブル

これからの時代のビジネスに不可欠な「サステナブル」の考え方と同時に、ゲストスピーカーとして登壇するディープレックベンチャーから最先端の知見を学びます。

ビジネス創出

本カレッジは単にプロジェクトのプランを構想するだけでなく、JR東日本のアセット(駅・まち・フィールド)を実践・実証の場として活用し、ビジネスを実際に創出します。

実施コース (2023年6月現在)

エコテックコース / フードテックコース / ライフテックコース

JRE Station カレッジから生まれたプロジェクト

- Frontier Garbageを用いたアップサイクルプロジェクト
- 農地を使わない天然繊維、MossFiber開発プロジェクト
- 中高生活動家と企業がつながるプラットフォーム「活動家」ラボプロジェクト
- コーヒー文化を楽しみながら生産現場を守る「東京コーヒー栽培」プロジェクト
- 海の多様性を守り日本食の文化を継承する「促成昆布製造」プロジェクト
- シークワサーの搾りかすで妊婦を救う「つわり軽減」プロジェクト
- 海藻を育て活用することで豊かな海を育む「海藻コンシェルジュ」プロジェクト
- 睡眠でケア現場の“人”を守る「Universal Sleep Laboratory」プロジェクト

地球 貢献型 リーダーズ

『地球貢献を実現する』ために必要なリーダーとは？そんな大きな問いを掲げ、スタートしたりバネスユニバーシティ構想。新たな挑戦を始めた「未来のリーダー」が経験から得た「知識」に触れ、次なる思考と実践を始めよう。

新たな発想を生み出す
ルール・制約があるから面白い！



住田 勇武 氏

株式会社商船三井 コーポレートマーケティング部（受講時）
株式会社カタフリ 代表取締役社長

参加コース JRE Stationカレッジ「エコテックコース2022前期」

カタフリの住田 勇武さんは、2022年6月から9月にかけて行われたJRE Stationカレッジエコテックコースを受講、修了後もそこで生まれたプロジェクトを自主的に進めています。4月には日本初となるメタバースイベントを成功させた住田さんに、カレッジで得られた学びとプロジェクトについて聞きました。

ものを活用し、できる範囲でやってみて、そこからわかったことを積み上げていくことが大事だということです。これにより、効果や価値が少しずつ可視化され、結果的に予算獲得につながるという順番です。カレッジのメンバーと初めて開催したイベントでもこの点は実感しました。

「次回も参加したい」という意見が多数寄せられました。大人側も、「若い世代のアイデアに触れることができ刺激的だった」と評価し「今後も協力関係を築いていきたい」と期待が寄せられました。

修了後もプロジェクトに取り組み、イベント開催を実現

-4ヶ月間の講座の中で、記憶に残っている学びはありますか？

住田 何かを新しく始めるのに、予算の有無は関係ないということです。できることから、小さく始めてみることの大切さを知りました。普段の仕事では、何か新しいことを始めようとするときまず必要な予算を取りに行くという動きが一般的ですが、新たな取り組みをする際に費用対効果を説明することは非常に困難です。結局、私自身、新しいことに踏み出すのを躊躇してしまったり、途中で断念したりするといった経験をしてきました。しかし、カレッジで学んだのは、予算はなくともすでにある

-どのようなイベントだったのですか？

住田 今年の4月2日に、中高生活動家6組と活動家支援に興味のある企業人12名を集めて「中高生活動家によるメタバースmeet up!」と称してプレゼンテーションとブースセッションを実施しました。会場は、日本初の試みとしてメタバースを用いました。メタバースを活用したことで、リアルタイムでの自由な移動や交流が可能となり、遠方からの参加も容易になりました。

参加した中高生活動家からは、「メタバース上での交流が楽しかった」という声や、



受講時のチームメンバーと住田さん（前列右）

-住田さんはこのイベントでどのような役割を担ったのですか？

住田 イベント全体を取りまとめるリーダーを務めました。5社から集まるメンバーを会社をこえて取りまとめるのは初めてだったため、新たな挑戦の場となりました。普段の仕事では、一緒に働く人々は大抵、同じ業界出身者や、すでによく知るパートナーです。そのため、目指すべき目標については、ある程度は共通理解があります。しかし、今回のイベントでは、全く違った背景をもつ人々と一緒に、目標設定から取り組むという新たな状況に直面しました。それぞれ異なる視点を持つメンバーと協力しながら同じ方向に物事を進めるということは、時として困難を伴いました。それぞれのアイデアを出し合い、議論が発散したり収束したりするプロセスを一つにまとめ上げるというのは、私にとって全く新しい課題でした。その過程が、私自身では考えつかなかった新しい視点やアイデアを引き出すことに繋がってきたのではないかと思います。

自分事に落とし込み、小さな1歩から始める

-リバネスユニバーシティは地球貢献型リーダーの育成を掲げていますが、住田さんが考える地球貢献とは何でしょうか？

住田 自分の子どもが大人になったとき

に困らないような、「暮らしやすい環境」を彼らに引き継いでいくことが、地球貢献だと考えています。平和であること、衣食住に困らないことなど、今の当たり前を当たり前だと思っはいけない。例えば私は、商船三井という船の会社で働いていますが、海運は日本の物流の99%を担っています。船を動かさなければ、日本の物流は断ち切れ、私たちの生活は破綻するでしょう。一方で今、世界中で船員が減っています。このまま減り続けると、船を運行できなくなるかもしれません。ここから小さな一歩として、私は、船員さんの働きやすさや業務効率を向上させるアプリの開発を、スピンオフベンチャーで行ったりしています。こうして自分事に落とし込み、できることから1歩を始める、それを続ける。これが地球貢献型リーダーではないでしょうか。

-最後に、カレッジでの学びを活かした今後の目標について教えてください。

住田 例えば「予算がない」という制約はマイナスと捉えがちです。しかし、カレッジ受講中にプロジェクトの創出に取り組んでいた時のことですが、制約を意識しないと予算も規模も壮大な案を思いつきがちで、そうするとアイデアは面白くても結局身動きが取れないということがありました。そんな時、「いま使えるアセットは何なのか」をよく考えて、制約条件を固めると、その制約の中で逆に面白いことが生まれるという経験をしまし

た。こうした経緯を含めて、「予算の有無は関係ない」「今あるものを活用して小さく始める」という学びを得ました。実感を持って得たこの学びを忘れず、これからも行動していこうと思っています。
(構成・立花 智子)



「中高生活動家によるメタバースmeet up!」の様子

住田さんが仕掛けるプロジェクト

中高生活動家と企業がつながるプラットフォーム「活動家」ラボプロジェクト

コア技術

異分野・異世代をつなぎ、
新たな知識を生み出す
ブリッジコミュニケーション

メンバー

ルート製薬株式会社 安藤達也
株式会社商船三井 住田勇武
クオン株式会社 吉原和希
新菱冷熱工業株式会社 脇坂英佑
東日本旅客鉄道株式会社 田中希使
株式会社リバネス 立花智子(コミュニケーター)

※所属はプロジェクト発足時のもの(敬称略)

今、中高生の中には、自らの情熱で社会課題の解決のために自立して行動できる人(=活動家)が多く誕生しています。一方で、活動家が1人でできることは限られています。活動家にはヒト・モノ・カネを素早く集め、試行できる場が必要です。そこで本プロジェクトでは、子どもの情熱を伝播させ、企業や個人を巻き込み、新たなものが生まれ続ける場を構築を目指します。ここから、活動家の活動がより加速されることで、社会課題が限りなくゼロに近づき、世界・地球が喜ぶ未来を実現します。

異分野の仲間と「地球の優しさをアップデートする」



五十棲 計氏

株式会社イヴケア 代表取締役 CEO

参加コース リバネスカレッジ「ブリッジコミュニケーションコース2022」

に入れた「地球」の視点とどうブリッジしていくか、と考えることで違った世界が広がっていったのも新鮮でした。

自分を突き動かすエンジンを得た

プログラムでは自身のビジョンをプレゼンし、宇宙工学をやっている人や、コミュニケーションのプロフェッショナルの方など、普段接することがない人たちを仲間にすることができました。私が熱を持っているテーマである「Well-being」や「多様性」について彼らとともに仕掛けるプロジェクトを構想していったのですが、最終的には「宇宙旅行が当たり前になる未来」にどんな文化やサービスが必要かを考えるに至りました。どんな多様性がぶつかり合うのか、どんなコミュニケーションが必要なのか、宇宙空間でつくる文明についてこれほど真剣に考えたのは初めてでしたね(笑)。チームメンバーとの議論の中で生まれた「地球の優しさをアップデートする」という言葉は、私のビジョンとも強く重なっており、今後の私を突き動かすエンジンになりそうです。

未知な相手と「何か一緒にやっちゃっている状態」をつくらう

4ヶ月間の活動を通じて、「わかるより先に面白いでつながること」、「信用の前

に信頼を築くこと」そして、「知ってからつくるのではなく、知りながらつくっていくこと」の3つの要素がブリッジコミュニケーションにおいて重要な視点であることを学びました。前半2つは異分野交流において特に重要であることがすんなりと理解できます。面白かったのは最後の1つで、思想の共有すら未完成な状態でも「何か一緒にやっちゃっている状態」にしてしまい、互いに共感できそうな未来はやりながら考えるという姿勢が重要なのだと実感しました。

また、今回のように「熱」を持っている個人が集まった集団の中では、リーダーシップを発揮する人間は1人とは限らない、という考え方が非常に大事だということもわかりました。チームの中にリーダーは何人いてもいい。それぞれの強みを発揮して、全員がどこでリーダーシップを発揮するべきか、というのが明確なチームほど、パフォーマンスが高く、ぶれないチームになると思います。今回出会った人たちと、これから仕掛けていきます。

社会課題の解決を目指す、仲間を求めて

私がリバネスユニバーシティに参加したのは、1社では出来ないような社会の課題解決を成し遂げるためには、自身が立ち上げた会社のビジョンや技術を魅力的に語り、より多くの人と繋がる必要があると考えていたからです。「地球貢献を実現するリーダーになる」ということについて、学生、大手企業、ベンチャーという多様な組織から集まった人たちと議論し、学び合える場は非常に良い機会でした。私の会社では毛髪成分分析からその人のストレスの状態がわかるという技術を活かし、現代人のストレスに起因する様々な課題の解決に取り組んでいます。人間中心に展開している事業を、自然との調和を視野

ブレーキを踏まずに行動した先に、
最高に面白い世界があった



村山 拳午氏

山梨大学大学院 博士課程3年

参加コース リバネスカレッジ「ブリッジコミュニケーションコース2022」
「ディープイシューコース2022(現・QPMI コース)」

らなければ成長しない!」、「もっと行動しなければいけない!」と回を重ねるごとに変化していくのを感じました。更に、異分野の相手に「共感を得る」そして自分自身が相手に「共感する」ということが非常に難しいことを知ることができて、未知な世界や人と繋がる価値の大切さに気づくことができました。

仮説だけでは何も始まらない

本コースを通じて、私に足りないのは「本気で取り組む」の転換であることがわかりました。もちろん、これまでも真剣に研究に取り組んできましたし、多くの時間を研究に投資してきましたが、「失敗しないように上手くこなす」という視点がどこかにあったような気がします。本コースの中で行った「酪農の課題解決」というテーマにおいても、途中までは「いい感じの仮説だけを立てて行動に移さない」という状態でした。その事実気づいてからは、「無駄かもしれない」「まだいいアイデアになっていない」と考えすぎずに、身近に訪問できる酪農家さんのところに行って話を聞いたり、論文を読み漁ってみたり、とにかく全力で動いてみました。その結果見えてきた世界はとても新鮮で、今まで体験したことがないワクワク感がありました。私は、研究紹介などで「石油資源の枯渇問題の解決を目指して」といったビジョンを語っていますが、実はまだ、その課題が顕在化しているスリランカ等の現場に行ったことはありません。「行かない理由はない、じゃあ行ってみよう。」そんな風に考えられるようになったことが、私の一番の変化だったと思います。

研究室の外で、プロジェクトを立ち上げる挑戦を

リバネスユニバーシティに参加していた1年間の間に、大学での活動にも変化がありました。実際に活動した例を挙げると、博士課程にいる学生同士が分野を超えて交流する活動の企画や大学が実施しているジュニアドクター自然塾プロジェクトのメンターに挑戦するなど、自分から積極的に未知なものに挑戦できるようになりました。また、博士課程学生の異分野交流会では「先生なしで、自分たちでもっと行動しよう」という話までに発展し、実際にいくつか具体的な活動を仕掛け始めています。その一つが「身近にある未利用資源を活用した人と自然を結ぶ新エネルギー獲得モデルの構築」です。学生が環境やバイオマス等の研究について議論するような場を設け、そこで実際に未利用資源からエネルギーを作ったり、ジュニアドクターに参加している子どもたちに体験プログラムを提供したりするようなプロジェクトです。再生可能エネルギーという言葉はよく耳にするようになりましたが、実際に自分たちで探してみる・作ってみる・体験してみることで、新しいアイデアが生まれるのではないかと考えています。このコースで実感した「出来ることから小さく、細かく、早くはじめる」という視点で、まずは身近にある枝などを燃やしてエネルギーを得て、年間どのくらいのエネルギーを作れるかを検証し、そこでどんな教育プログラムを展開できるかをすぐ試していく予定です。

未知な世界や人と繋がる価値に気づいた

リバネスユニバーシティの中で、100年先に思考を飛ばして自分が何をやりたいのかを本気で考えた時、研究室のメンバーや学会のような狭いコミュニティで満足してはいけないと気づきました。特にこの数年はコロナによって今まで以上に閉鎖的なコミュニティだけで議論が進み、議論する相手も固定化していました。本コースでは、今まで接する機会がなかった企業の方やベンチャーの創業者の方の考え方に触れ、コロナ禍でも行動している人たちをたくさん見ながら「コロナ禍と行動ができていないことは全然関係なかったじゃん」と強く感じました。また、私の考え方が「今のままでは本当にやりたいことは達成できない!」、「もっと外の人とコミュニケーションを取

これまでの方法が通用しない環境で ビジネスの原点を学び直す



橋本 浩氏

守山乳業株式会社

参加コース リバネスカレッジ「ディープイシューコース2022(現・QPMI コース)」

験や知識が、他の参加者の築きを一步深める材料になるなど、メンターとして役に立てた気がします。

全く違ったやり方に戸惑った

ところが後半は、深掘りした内面を糧にして開発するテクノロジーを決め、外で検証する活動になったところから大企業のやり方が通用しなくなりました。

大企業の商品開発では、例えば5原則のようなものに従って開発を進めていきます。多くの場合、技術開発で強みを作ってから商品開発で最適化するような進め方です。自由に発想して、と言われてもすぐには切り替えられないことが多いと思います。

一方、リバネスユニバーシティーで実践したのは2つのことです。1つは始めに熱い思いとベクトルをしっかり持つことに力を注ぎ、始めからビジネスモデルを考えすぎないこと。2つ目は自分で選んだ道が正解になるように仕向けるということです。そのために、徹底的に自分の内面を深掘りすることが必要でした。

仕事の中でも消費者調査をすることで尖った商品アイデアが丸くなってしまうことがあります。開発した商品が本当に世の中を変えられるのかを考え、自ら動いてお客さんの顔を毎日見るといった一次情報から、ヒット商品は生まれるという原点の振り返りになりました。

若い人に巻き込まれることで学ぶ

「まずはやってみよう」という方針のもと、参加する方のスピードが加速し、その

エネルギーに引っ張られ、気づけば私もその中に完全に巻き込まれていました。本気になった人の物事を動かす加速度を目の当たりにし、これがまさに「若い人から学ぶ」ということだと思いました。今回の経験を経て、今後、社内においてもGive&Takeになるよう経験を棚卸し、開発の知見を伝える活動を開始してみたいと考えています。また、リバネスユニバーシティーで気づいた、自分が突き詰めたいテーマの実現に向け、多様な会社と協働することも模索していければと思っています。

※メンターとは

リバネスカレッジでは、30年以上のビジネスキャリアを持つプロフェッショナルシニアとともに新しい生き方を開拓するプロジェクトを開始、各コースで実証実験を行っています。自らのビジネスの経験から得られた知識を若いスタートアップや組織内の若手に提供しながら、自らも新しいことを仕掛けるために新しい知識を若い人から学ぶ人を「メンター+インターン」を組み合わせ「メンター」としています。その1人として参加いただいたのが橋本さんです。

本取り組みに興味のある
個人・法人を募集しています。

[問い合わせ先]
株式会社リバネス 担当:森安・環野
sd@lnest.jp

シニアと若手が学び合う 「メンター」への挑戦

お菓子メーカー、生活材メーカーなど複数のメーカーの研究開発部署で、健康機能食品の開発などのキャリアを積んできました。シニアが若い人に経験からくる知識を提供し、若い人から新しい知識を学ぶ知識の等価交換というユニバーシティーの「メンター^{*}」のコンセプトに共感して個人として参加しました。

前半はひたすら内面に入っていく時間を過ごしました。自分が社会に対して感じているQuestionや自身の興味を深掘りしていく中で、「健康に年をとるためのテックの開発」についてPassionがあることに気づきました。プログラムは他の参加者の方との壁打ちにより、自身の深掘りをしていく設計になっていましたが、私がつ経

L UNIV. 人材開発論

誰もがコトを起こすリーダーになれる

異なるものに橋をかけ、 新たな価値を生み出す 「ブリッジコミュニケーション」

人工知能(AI)を始めとする技術の爆発的な普及により、人類が平易な分析や判断、単純作業から開放されつつある今、これまでは一部の限られた人が行っていた「新しいコトを生む」ことに多くの人が関わるようになります。これにより、今後、全ての企業・大学等の組織は、0から1を生み出す力を持った人材の「発掘」だけでなく「育成」に取り組むことが必要になってきます。

異分野融合・異業種連携の重要性は各所で語られていますが、予算を投じたり、多様な人材を集めるだけで、コトが起こるのは稀な事例です。

例えば事業部員と研究所員の間にある分断、研究者と非専門家の間にある分断、起業家と投資家の間にある分断、異分野の研究者同士の分断…。各組織において、それらが少しでも解消するだけで多くのコトが起こり始めることは想像に難くないでしょう。

ブリッジコミュニケーションは、そんな「分断」の間に「橋」を架ける力です。人と人との間を取り持つコーディネーターでもなく、難しい専門用語をわかりやすく解説する通訳者でもありません。関係性のなかった両者を結合させる(化学反応を起こす)には熱が必要です。自らその

熱を発し、共通点のない相手とでも共感できる何かを「つくる」ことで、通常では難しいようなコラボレーションやアイデアを生み出すことができます。これがブリッジコミュニケーションです。この力は「話せる・書ける」2つの力を徹底的に磨くことで誰もが習得可能です。

「考え方や価値観、専門性の異なる相手と相互理解し、両者の知識を組み合わせる新しいアイデアを生み、共通のビジョンを掲げてチームをつくる」ことを、誰もができるようにすることで、課題解決を加速したい。そんな思いで生み出されたのがブリッジコミュニケーションの概念なのです。

ブリッジコミュニケーションの教科書ができました！



『誰もが「地球貢献型リーダー」になれる思考法』

【出版社】リバネス出版(株式会社リバネス) 【価格】2,000円(税抜)

【著者】楠 晴奈 【コラム】西山 哲史・石澤 敏洋・藤田 大悟・岡崎 敬

- 第1章 地球貢献型リーダーは「サイエンスブリッジコミュニケーター」
- 第2章 さあ、はじめよう！トレーニングに必要な4つの心構え
- 第3章 自らコトを起こす考え方や行動を学ぶー誰でもできる、5つの思考の変化ー
- 第4章 仲間を集める方法を学ぶー「話せる・書ける」を支える4つのスキルー
- 第5章 仲間を集める方法を学ぶー「子ども」を仲間にする2つの挑戦ー
- 第6章 リーダーとなって動き続けるテーマを決めるー3人の仲間を集める旅ー

特別対談

新しい学びをつくる ラーニングクリエイターを 「まちづくり」の フィールドで育てる



田中 浩 氏

東武不動産株式会社 代表取締役社長

前田 里美

株式会社リバネス 教育総合研究センター長

新しい学びをつくるラーニングクリエイターを「まちづくり」のフィールドで育てる

2023年11月、リバネスカレッジに新たなコースが誕生します(詳細はP.18参照)。「コトづくり」を目的とした多様な拠点が全国各地に生まれています。それぞれのビジョンを達成するためには、ハード面だけでなく、多様な視点を調和・統合させ、新たな関係性を創造していく具体的な活動(ソフト部分)を生み出していくリーダー人材が必要です。「ラーニングクリエイター」は多様な視点を持った人と人が出会い、互いに学び合う「豊かな学びの場」をクリエイトできる人材です。本プログラムは、単に座学で終わるのではなく、墨田区の「ことまちスクウェア」を実践フィールドとし、「墨田区の街のにぎわいづくり」という具体的なテーマを設け、大人と子どもが「一緒に活動し、互いに新しい発見をする」場作りに挑む、他にはない実践的なコースとなっています。本コースのパートナーである、東武不動産株式会社代表取締役社長の田中浩氏と、本コースの開発責任者であるリバネス教育総合研究センター長の前田里美が本コース設立の思いを語ります。

「地球貢献」と「まちづくり」が接点になり生まれた新コース

前田 実はこのラーニングクリエイターというコンセプトは2年前に中高の先生との取組の中で生まれたものなんです。いま、従来の先生から生徒への一方的な知識伝達型の授業から、生徒が主体的に学ぶ探究的な学習への大転換が学校教育の中で始まっています。探究には「問い」が必要です。その中には「社会のために」「身近な課題の解決のために」といった視点を取り入れることへのニーズも高まってきています。そういった中で、学校の先生が社会との架け橋となり、自治体や住民、企業や研究者といった人々を巻き込みながら、社会に根ざした「学び」をつくる方法を学ぼう、という背景があったのです。コーディネーターではなく、「ラーニングクリエイター」としたのは、子どもたちにとって学びがあるだけでなく、そこに関わる大人たちにも学びがあるような新しい活動を「創る」ことが重要だと考えていたからです。そうすることで、「学校に協力する」のではなく双方能動的な関係性がつくれると思っています。

今回、このコンセプトと御社との掛け合わせで、以前は対象が先生だったところ、先生に限らず「まちづくり」をテーマに新

しい学び場の開発ができることに、とてもワクワクしています。

田中 リバネスユニバーシティのお話を伺った時、異業種から多様な人が集まり、通常業務とは全く違うテーマについて考えるというコンセプトがとても面白いと思いました。実は私自身、20年ほど前に「フォーラム21」という異業種交流会に参加したことがあり、非常に刺激的な経験をしました。30社以上の全て異業種の企業から毎年1人ずつしか参加できず、企業経営に関することは一切やらず、少子高齢化や安全保障など、社会課題、教育等をテーマにチームで議論したり、実際に現場に行ってヒアリングしたり、勉強会を企画したりといったことをする場でした。その時に出会った方との繋がりは今でもありますし、当時立ち上げた学校向けの講演活動は今でも続いています。「地球貢献型リーダーを育てる」「異業種混合」を掲げるリバネスユニバーシティにはそれに近いものを感じ、社員を参加させました。案の定、不動産業とは全く違うことを立ち上げ、楽しくやっているようですね。

前田 そうですね。社員の方は、「JRE Station カレッジ」に参加され、そこで「広大な農地を使用しない」天然繊維の合成プロジェクトに取り組まれています。その製

造拠点に空き家が使えるのではないかと、いった話もあり、思いがけないところから御社との繋がりもできるかもしれません。

田中 御社の事は以前から知っていましたが、研究者集団というイメージが強く、我々とは全くご縁がないかなと思っていました。「まちづくり」が御社との接点となるという発想がなかったのですが、今回ラーニングクリエイターの話を持ちかけてもらったことが良いきっかけになりました。「まちづくり」も同じ業種・顔ぶれで進めるのではなく、もっと広い視点で未来を考えながら、様々な業界・専門家と混じり合って化学反応を起こしていきたいと考えていましたので、とても良いタイミングでした。

ゼミの舞台は市街地の課題解決

前田 今回は「まちのにぎわいづくりに繋がる学びの場をクリエイトする」というのがゼミテーマになっています。御社とのお話の中で「ことづくり」という言葉が出てきましたが、不動産業を営まれている御社にとって、どんな思いが込められているのでしょうか。

田中 実は、親会社である東武鉄道は沿線開発を古くから行っていますが、弊社では

[特別対談]

新しい学びをつくるラーニングクリエイターを「まちづくり」のフィールドで育てる



「まちづくり」に関わる事業はなく、ここ数年で力を入れ始めた取り組みです。少子高齢化やオンライン化による暮らしの変化の中でこれからの街の発展、街の開発とはどんな形なんだろうかと考える中で始めたことです。これは私個人の話ですが、大学の卒業論文のテーマがまちづくりに関するものでして、個人的にもまちづくりに興味があったというのも1つの理由です。卒論でも取り上げた当時の市街地開発はどんなものだったかという、現在の主要駅を見ていただくと思わすのですが、駅前ロータリーにはペDESTリアンデッキを作って歩行者と車を分離して、目の前に大きな商業施設を誘致して高層マンションを建てるといった大規模な開発でした。当時はそれが良かったのですが、一見すると何駅かわからない、似たような街がたくさんできていきました。さらには少子高齢化が進んで、駅前の百貨店は次々と撤退し、ペDESTリアンデッキはユニバーサルデザインなど現代の価値観にそぐわなくなってきたというのが現状です。地方都市は財政も厳しく、再開発もなかなか難しい状況の中、新しいものをつくるのではなく、既存のものをリノベーションしながら、その街にある歴史や文化、そこに住んでいる人たちを巻き込むことを考えていくことが大事だと考えています。

前田 そういった背景から「ことづくり」という考えがでてきたんですね。

田中 そうですね。開発とはハードを作って終わりではなく、そこからがスタートなんですよね。「街の賑わい」とは言いますが、それは一体誰が作るんだと考えた時に、最近はその地域を拠点にしている私たちのような企業なんじゃないかと思うようになりました。今、市街地の多くは、何代もその場所に根を張って暮らしている方は殆どいないんですね。新しい住民ばかりになると町内会の機能は弱まります。そんな街の中でにぎわいをつくる中心になれるのは、この先も長くこの土地に在るであろう企業だと思うのです。別にイベントやお祭りをやるのが全てではなく、人が集まってきたり、色んな人を巻き込んだりするような仕掛けをつくることに挑戦しようと考えたのです。

前田 ラーニングクリエイターは「学び」を起点に人と人の繋がりをつくる人、と考えることで、田中さんがおっしゃっているまちづくりと深く繋がると感じました。私がラーニングクリエイターを始めたのは、学校の学びと社会との関連を強めるためには自分たちもそれぞれ成し遂げたいことや、社会に貢献したいとアクションを起こしているような人たちが「学び」に関わること

が必要だと思ったからです。今回は、通常だったらあまりまちづくりのフィールドには集まってこないような人たちが「面白そう」と集まってくれる場にしたいですね。

大人は子どもから遊び心を学び、共に100年後をつくる

前田 もう1点、今回は「子どもが参加できるようにする」ところも大きなポイントですが、その点についてはどのように考えていらっしゃいますか？

田中 すごく重要だと思っています。都心に住んでいる子どもたちには自分が住んでいる街に「地元・故郷」という意識があまりないんじゃないかなと思うんです。親世代からその土地に住んでいるわけではなく、私立の小学校や中学校に進学する子も多いですから、近隣に住んでいる子同士の繋がりもそこまで深くない。そうすると、住んでいた場所というよりは小さい頃によく行った場所や楽しかった思い出がある場所が心の故郷になるんじゃないかと思っています。故郷意識を持ってもらえたら、そこにある企業に入社してくれたり、将来この街のために一汗かこうと思ってくれたりするんじゃないかと考えています。そしてもう1点、子どもたちに期待している

新しい学びをつくるラーニングクリエイターを「まちづくり」のフィールドで育てる



のは、遊び心ですね。楽しいことをやろうとする時って遊び心が必要だと思うんですよね。でも大人になると、それなりに立派なことを言わなければ、と余計なことを考えてしまう気がします。そこに子どもが入ることによって大人の触媒になるんじゃないでしょうか。

前田 そうですね。リバネスユニバーシティは「100年後の未来に思考を飛ばし、地球貢献を考える」という要素を大事にしているのですが、そこには絶対に子どもを入れた思考をしないといけないと思っています。なぜなら100年後生きているのは私たちではなく子どもたちですし、子どもを仲間にする、思考の時間軸が一気に半世紀くらい伸びるんですよね。それはまちづくりでも同じだと感じています。

「学び合い」で新しい人と人の繋がりをつくることを目指して

田中 改めて、ラーニングクリエイターってどんな存在でしょうか。

前田 先日、学校の先生とお話したときに、「街の課題解決をキーワードに、生徒が探究活動をする授業があるけれど、そこで、街の課題と理科実験が繋がるようなこと

をしたい。何かいいアイデアはないだろうか」という相談を受けました。先生は悩まれていましたけど、すごくワクワクしませんか？これこそラーニングクリエイターの出番かなと思います。今回のゼミでは、「宇宙が好き」とか、「ゴミをアップサイクルしたい」とか「お祭りをつくりたい」とかいろんな熱を持った人が集まって、大人も子どもも参加できるプログラムを企画することがお題になっています。これは、子どもが一方的に大人から学ぶような学習教室とか、大人が一方的に子どもからアイデアを搾取するようなものではなく、一緒に探究したり、一緒に試行錯誤したいと思っています。そんなプログラムが作れるようになれば、結果的に学校教育にもっと参加したい人やまちづくりに参加したい人が増えるんじゃないでしょうか。自分がコンテンツメーカーになって、そこに人を集めて、仲間をつくるっていう、そんな起点となる人がラーニングクリエイターかなと思っています。

田中 とても楽しみです。にぎわいづくりというのは人と人の繋がりをつくることではないかと思います。異分野の人や普段接しない人と何かをやるには、お互いが持っている知識を学び合うことって必ず必要ですし、自然と「学び」になりますね。

前田 私は「繋がり」という言葉に、橋を作るイメージを持っています。橋には部品が必要ですよね。お互いに部品を出し合うようなことができないと繋がりができないんじゃないかと思っています。

田中 今、新しいことを始めるのは、一昔前と比べて格段にハードルが低くなっています。紙媒体だけでなく、SNSなどで誰でも発信できますし、資金もクラウドファンディングなどで集めることもできます。あとはそのアイデアを実行する「場」を提供するところで、私たちが貢献できるのではと思っています。ここにメモがありますが、私自身も、やりたいことがたくさんあります。皆さんと実現したいですね。

前田 ユニバーシティという学びの場にするだけで自分だけではできなかったようなことを、互いに学びながら一歩目を作りたいですね。これからどうぞよろしくお願いします。

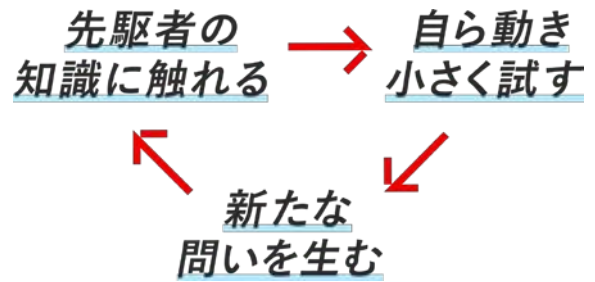
2023年度後期開講コース 受講者募集中!

「地球貢献型リーダーを育成する」をビジョンに掲げ、多様な組織の人材が集まり、学び合いながら、越境的なプロジェクトを生み出す場としてリバネスユニバーシティーは多様なコースを開発・運営しています。

特徴 1

「先生」はいない、
自ら思考し、
実践して知識を創る

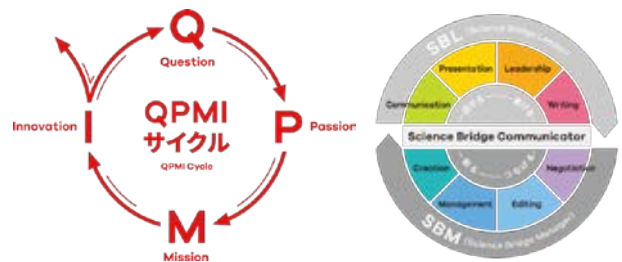
リバネスユニバーシティーには「先生」は存在しません。教えてもらうのではなく、自分で考えてやってみる。質問に答えるのではなく自ら問いを発する。これがリバネスユニバーシティーでの学び方です。



特徴 2

オリジナルの2つの概念

リバネスが数々のプロジェクト創出を通じて構築した「QPMIサイクル」と「ブリッジコミュニケーション」の概念を学べるのはリバネスユニバーシティーだけです。

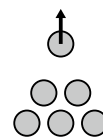


特徴 3

個人のキャリアアップ
ではなく、
組織のリーダーを育成

個人のキャリアアップが主目的ではなく、「新たな思考を持ち帰り、チーム・組織の変化を促すリーダー」を育成します。受験生の派遣元の企業と連携し、コース受講だけでは終わらない、継続的な人材開発系の構築を目指しています。

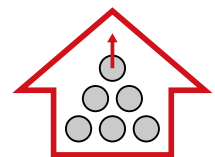
一般的な人材育成プログラム
個人のキャリアアップが目的



— 育成内容 —

定型化したスキル / 前例のある課題への対応 /
トレンドベースの新規事業構想 etc.

リバネスユニバーシティー
組織のリーダー育成が目的



— 育成内容 —

未来を切り拓くスキル / 未解決課題へのマインド /
自社アセット活用前提の新規事業構想 etc.

リバネスユニバーシティーのコースの基本型

すべてのプログラムは「座学」ではなく、他流試合でチームを作り、地球貢献につながるプロジェクトを構想します。

講義

講師やゲストスピーカーとのケーススタディやディスカッションを通じて、自分の価値観、マインド、行動を変化させる考え・行動を身につけます。

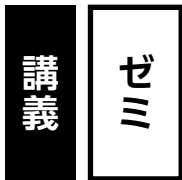
ゼミ

共に地球の課題を解決する事業(活動)をつくる！というパッションを持ったプロフェッサーと、実現に向けてスピード感を持って仮説検証を繰り返す次の一歩を決めていきます。

個別活動

自身も新規テーマ創出に取り組み、多様な個のネットワークを持ったコミュニケーターと、次の一歩を実行します。さらに必要な知識のインプットも行います。

1回目



個を瞬発的に
チームに
していきます

個別活動

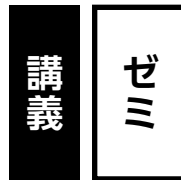
2回目



今すぐ
できることを
その場で
決めます

個別活動

3回目



徹底的に
削ぎ落とし
本質を
見極めます

個別活動

4回目



本気で応援
できる
チームと
次を仕掛けます

参加者が得られるもの

自分の常識を変える

組織や肩書きを取り払い、異分野・異業種・異世代の全く異なる価値観・思考を持った人材が集まり、100年先の未来に思考を飛ばして「地球貢献」を本気で考え実践しながら自分の価値観、マインド、行動を変化させる。それがリバネスユニバーシティーが開発・実施するコースです。

自社に「異分子」の思考を持ち帰る

「アジア最大級の中高生との研究プロジェクト」「超異分野学会」「テックベンチャーのエコシステムの開発」など、年間200以上のプロジェクトを創出する研究者集団リバネスが20年かけて蓄積した「ブリッジコミュニケーション」「QPMIサイクル」といった独自の概念を学びます。

新たに仕掛ける テーマに初速をつける

3~4ヶ月という短期間の中で、「仮説を立てて小さく試す」を繰り返し、具体的なプロジェクトを構想・実践するという実践型のプログラムです。コース受講は始まりであり、受講後に仕掛け続ける初速をつくる場です。そのプロセスの中で結果的に成長していきます。

リバネスユニバーシティーが運営するコースの詳細はこちら <https://univ.lne.st/>



2023年度後期 開講コース一覧



コース詳細はこちら

<https://univ.lne.st/courses/>

リバネスユニバーシティは各カレッジがコースを開発し、実施しています。

※リバネスユニバーシティは、学校教育法上で認められた正規の大学ではありません。

コースの種類

ベース概念

これからの時代に必要な概念を
集中的に学ぶコース

プロジェクト型

概念教育+プロジェクトビルディング
を実践するコース

Leave a Nest COLLEGE リバネスカレッジ開講コース

QPMI コース

ベース概念

実施期間 2023年11月7日～2024年2月6日(火曜開催:17:00-19:30・全6回)

概要

QPMIサイクルはQuestion、Passion、Mission、Innovationの頭文字です。「環境問題」「食糧問題」といった大枠のコンセプトだけでは課題解決の推進力にはなりません。世界を変えるビジネスはたった1人の「熱」から生まれます。本コースでは圧倒的な数の課題解決型ベンチャーのイシューに触れ、自身が情熱を傾けて取り組むテーマを徹底的に深掘り・言語化するプロセスを通じて、真の課題と推進力となる具体的なミッションを明らかにします。

最終プレゼン課題

自身が情熱を傾けて取り組むテーマを明らかにし「覚悟を決めて」宣言する

参加費 330,000円

コース開発責任者

武田 隆太

株式会社リバネス 執行役員

米国オハイオ州立大学にて植物RNA病原体に関する研究を行い、Ph.D.取得。2011年よりリバネスアメリカの立ち上げに参画し、2012年にリバネス入社。人材開発事業部部長、国際開発事業部部長、グローバルブリッジ研究所・所長を歴任。2013年以来、国内でシードアクセラレーション事業として立ち上げた「TECH PLANTER」の海外展開を推進。現在は海外のベンチャーエコシステムのキープレイヤーのネットワークを活かし、東南アジア諸国の政府系機関やベンチャーと連携した事業立ち上げに携わる。

ラーニングクリエイターコース

プロジェクト型

実施期間 2023年11月10日～2024年2月16日(金曜開催:17:30-20:00・全7回)

概要

「ラーニングクリエイター」は多様な視点を持った人と人が互いに学び合う「豊かな学びの場」を創造できる人材です。今回は、墨田区の「ことまちスクウェア」を実践フィールドとして「墨田区の街のにぎわいづくり」につながる「学びの場づくり」に挑む、実践的なコースとなっています。

最終プレゼン課題

大人と子どもを巻き込み「まちのにぎわいづくり」に繋がる教育プログラムの企画提案

協賛 東武不動産株式会社

コース開発責任者

前田 里美

株式会社リバネス 教育総合研究センター長

高校を卒業後渡米。Wright State Universityで人間工学心理学の修士、博士号を取得。2010年にリバネスに入社。若手研究者向け研修、教員研修、中高生の国際教育企画の開発に従事。2018年4月から、リバネス教育総合研究センターのセンター長として、非認知能力の評価系と育成の研究を、学校現場の先生方と一緒に取り組む。

ブリッジコミュニケーションコース

ベース概念

実施期間 2023年6月13日～8月29日(火曜開催:17:00-19:30・全7回)

参加費 165,000円

前期実施中

JRE STATION カレッジ JRE Station カレッジ開講コース

エコテックコース		プロジェクト型
実施期間	[後期] 2023年11月1日～2024年2月21日 水曜開催: 18:00-20:30 (第7回と第8回のみ19:00開始・全8回)	
概要	既存の産業は資源が維持されることを前提としており、崩壊がすでに始まっています。このコースでは、現状を打開し、水質浄化や廃棄物循環、災害対策といったサステナブルな地球環境の実現を目指します。	
	最終プレゼン課題 投資家の心を動かすプレゼンテーション	
参加費	495,000円	実施場所 東京駅キャンパス (STATION DESK 東京 premium)
	コース開発責任者 高橋 修一郎 株式会社リバネス 代表取締役社長 COO 東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了、博士(生命科学)。リバネスの設立メンバー。リバネスの研究所を立ち上げ、研究支援・研究開発事業の基盤を構築した。これまでに「リバネス研究費」や未活用研究アイデアのプラットフォーム「L-RAD」など、独自のビジネスモデルを考案し、産業界・アカデミア・教育界を巻き込んだ事業を数多く主導している。2010年より代表取締役社長 COO。	

フードテックコース		プロジェクト型
実施期間	[後期] 2023年11月6日～2024年2月26日 月曜開催: 18:00-20:30 (第7回と第8回のみ19:00開始・全8回)	
概要	食えることは人が必ず必要とする行為。人類の歴史の中で食を起点にさまざまな文化や価値が生まれてきました。しかし、いま食料資源の枯渇、フードロスなど食の問題が数多く存在しています。このコースでは「新しい食の循環」をテーマに、ビジネスを生み出します。	
	最終プレゼン課題 投資家の心を動かすプレゼンテーション	
参加費	495,000円	実施場所 新大久保駅キャンパス (K,D,C,,)
	コース開発責任者 塚田 周平 株式会社リバネス 執行役員 CRO 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻博士課程修了。博士(農学)。設立初期の2003年よりリバネスの運営に参画。実験教室、各種ライティングの実践を積んだ後、アグリ分野の先進技術開発・導入、地域創業エコシステム構築事業の立ち上げを行う。大手・中堅企業やベンチャー、研究者等との連携による技術開発、事業開発に現場主義でコミットしている。	

ライフテックコース (プレ開講)		プロジェクト型
実施期間	2023年11月7日～2024年2月20日 木曜開催: 18:00-20:30 (第7回と第8回のみ19:00開始・全8回)	
概要	生活スタイルや考え方の変化に伴い、性別、世代、国籍などの垣根を超え多様性を受け入れながら、個々の豊かな人生について考えることが重要になっています。ここでは医療、福祉、教育、働き方などの視点から、これからの人の暮らしにまつわる事業を構想します。	
	最終プレゼン課題 投資家の心を動かすプレゼンテーション	
参加費	495,000円	実施場所 高輪ゲートウェイ駅キャンパス
	コース開発責任者 井上 浄 株式会社リバネス 代表取締役社長 CKO 東京薬科大学大学院薬学研究科博士課程修了、博士(薬学)、薬剤師。博士過程を修了後、北里大学理学部助教および講師、京都大学大学院医学研究科助教、慶應義塾大学特任准教授を経て、2018年より熊本大学薬学部先端薬学教授、慶應義塾大学薬学部客員教授に就任・兼務。研究開発を行いながら、大学・研究機関との共同研究事業の立ち上げや研究所設立の支援等に携わる。多くのベンチャー企業の立ち上げにも携わり顧問を務める。	

参加のヒント

どういった人材を送り出すのが適切か？
どのような参加の仕方が最も効果的か？
といった参加にまつわる質問・疑問に答えるコーナーです



Q 派遣する社員をどのように選ぶのが効果的でしょうか？

A 手上げ制研修の対象にして「本気の人」を送り出す

開講時から継続的に社員を送り出している株式会社丸井グループの大竹桃子氏に、社内でもう運用・活用しているか教えていただきました。



難易度の高いレポート提出で受講者を選抜

2022年より当社の「選択制研修(手上げ制研修)」の対象とし、特定部署の社員のみでなく役員から新入社員までの全社員から受講希望者を募るようにしました。応募時には、「サステナビリティ視点で自身が解決したい社会課題と、それを丸井グループのアセットを使ってどのように実現したいか」「前の質問で挙げた課題を実現したいと思ったきっかけや原体験」「自身のアピールポイント」の3テーマを盛り込んだレポートの提出が必要となります。

このテーマは、手上げ制研修の募集要件の中でも比較的、難易度が高いと思います。しかし、本気度の高い人材を選んで送り出したいと考え、このテーマを設けました。結果、2022年度後期は2枠に対して31名から応募があり、提出されたレポートを基に受講者2名を選抜しました。「サステナビリティ」への興味、関心が高い傾向にあることから、比較的、若手社員からの応募が多かったです。

修了後は「報告会」で結果を発表する

受講後の対応もアップデートしています。カレッジ修了後、その結果を担当役員の前でプレゼンテーションする「報告会」を2022年に新設し、本カレッジ受講の流れに組み込みました。最初の受講者はカレッジを修了し、「野菜粉末アップサイクルプロジェクト」という新規事業の種を持ち帰ってくれました。直属の上司もそれを高く評価し、当社グループの代表にプレゼンテーションする機会を設けました。受講成果の「見える化」は効果的であると実感したため、受講したらそれで終わりではなく、その後の報告会までを流れに組み込んだわけです。

修了から1ヶ月ほど経って実施した「報告会」には担当役員、人事担当執行役員に加え、受講した社員の直属の上司も立ち会い、受講を通じて学んだことや、創出したプロジェクトについて発表してもらいました。発表後は参加した役員陣から活発な質問や意見が出て場は非常に盛り上がり、当初予定した1時間では終わらないほどでした。

持ち帰った「アイデア」をどう自社で育てるか

受講生募集、受講後の報告会など順調にアップデートしてきましたが、受講中の社員のフォローを含め、効果的な活用に向けてまだ課題はあると思っています。今の最大の課題は、受講した社員が持ち帰ってきたプロジェクトのアイデアを、どう具体的に自社の事業として展開していくかという点です。「持ち帰ったプロジェクトのゴールを、当社としてどこに設定するか」「プロジェクトの提案内容が当社の新規事業として推進すべきものだった場合、どの部署でプロジェクトに取り組むか」「受講した本人自身にプロジェクトに取り組んでもらうために、異動を前提とするか」。こういった点については都度、手探りで対応しており、まだ明確化し切れていないため、今後、もう一段の整備が必要だと考えています。これまで継続して社員を送り出してきて、JRE Stationカレッジが人材育成に有効であるということは認識しています。「人材育成」だけでなく「新規事業の創出」にも繋がるよう更にこのカレッジを活用していければと考えています。



多様な学びと キャリアをつくる

人生を通じて消えることのない情熱の炎を灯す

リバネスは学生ベンチャーから始まりました。

「学生の身分だから」と壁をつくることなく、共に挑戦する仲間・メンターと出会う場を設け、互いに切磋琢磨し、夢を語り、限りなく大きなビジョンを打ち立てることを応援したい。

その思いからリバネスユニバーシティでは学生のリバネスユニバーシティのコースへの無償参加や、学生のチャレンジを応援する奨学金制度を開始しました。

今回は、2022年度に開始したリバネス奨学金のプログラムについて紹介します。

「リバネス奨学金」プログラム始動！

学生とともに企業内のアントレプレナーシップを醸成する

企業とアントレプレナー人材のミスマッチの解消

変化の大きな時代、企業の中の人にも適応していく力が求められています。このような時代には、既存事業にとどまらず、新たな事業への挑戦が必要であり、それを推し進めるアントレプレナーシップをもった社員の存在は企業にとって重要です。

一方で、大学や学生も変わってきています。昨今、大学の技術シーズの事業化が期待され、大学発ベンチャーはハイペースで数を増やしてきました。大学VCも立ち上がり資金を提供し始めています。身近に事業化に取り組む教員が増えている他、カリキュラムとしてもアントレプレナーシップについて学べる機会が増えています。このような大学の教育環境の変化により、アントレプレナーシップを持つ、もしくは発揮する適正のある学生は増えていると考えられます。

しかし、このような学生は、既存の企業に入社することに多少なりとも疑問を持っています。それゆえ新卒採用することは一筋縄ではいかないでしょう。アントレプレナーシップを発揮している学生は既

存の採用ルートでは力を発揮できないことが多く、その適性がある学生も現在の評価基準の中では型にはまっていてしまいます。このような学生を採用するには、新たな採用方法が必要です。

この「既存の採用ルートと、アントレプレナーシップを鍛えた学生とのミスマッチ」という大きな課題を解決すべく、リバネスが新たに考案したのがリバネス奨学金の取り組みです。実は、学生はアントレプレナーシップを学びながらも、それを発揮する行動にうつす機会はまだ多くありません。そこで、その機会を企業が支援することで、アントレプレナー育成を加速することと企業へのアントレプレナー人材の流入を両立出来ると考えました。

奨学金を「投資」に位置づける設計

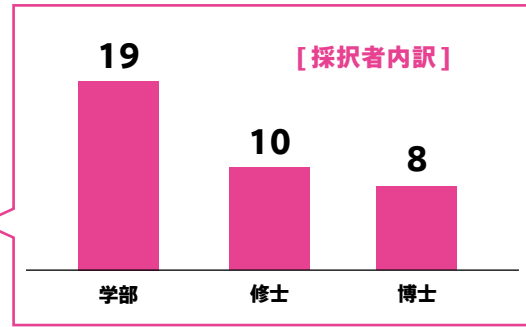
多くの奨学金プログラムは、投資には位置づけられていません。給付型の場合は返済も求められません。リバネス奨学金は学生の「活動」を支援するためのプログラムです。そして金銭的な返済を期待するのではなく、ユニークな活動を通じて世の中に働きかけることを期待してお金を渡す、という設計にしています。

自らも学生ベンチャーとして始まったリバネスは、多くのメンバーが学生だった事業立ち上げ前に、周囲の人生の先輩たちから支えられて成長してきた経験があります。この経験から、大学の勉強でも、起業でもない、はじめて学外に目を向けた活動を支援することが、その後のアントレプレナーシップ発揮につながるのではないかと考えました。また、活動資金だけでなくリバネスのプラットフォーム、これまで社員が築いてきた知識や関係性も活用出来るようにすることを決めました。これは、2016年にリバネス代表の丸幸弘がNPO法人ETIC.の運営するMAKERS UNIVERSITYにメンターとして参画した経験が元になっています。丸幸からはサグリ株式会社の坪井氏や株式会社イノカの高倉氏など次世代の起業家が数多く生まれました。そして、リバネスとしても共に事業を作っていく大切なパートナーになりました。

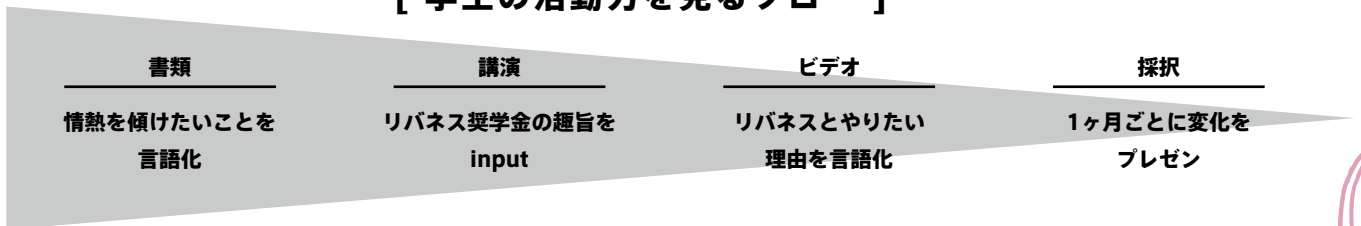
これらを踏まえ、リバネス奨学金のプログラム設計が生まれました。給付する奨学金は10万円。それだけでなく、学生たちにはリバネスの持つ考え方、人間関係、その他活動を目的に向かって前進させるためのスキルやアセットをを惜しみ



[数字でわかるリバネス奨学金]



[学生の活動力を見るフロー]



なく提供することになりました。学生が「応援された」という実感を持つことを重要視した設計です。

集まった114名

第一回目のリバネス奨学金は2022年12月に募集を開始しました。「科学技術の発展と地球貢献を実現する」というリバネスの理念を掲げ、これに資する社会実験的な活動を構想し、実現していく強い意思を持っている学生を対象者としました。申請書で問うたのは端的に自分のやりたいこととその理由のみ。次に、申請者全員に対してゼミ長による講演会への参加を必須条件とし、その内容を以て次の選考に進むか否かを申請者自身に判断いただきました。講演会の中ではリバネスの理念やこの奨学金プログラムの目的、ゼミでどのような活動を行うのかを伝えています。この講演を聞き、この中で活動したいと考えた学生のみが、二次選考のビデオプレゼンテーションを提出します。2分間のビデオから申請者の熱意と自社の理念に共感できそうかを鑑みて、最終的に奨学生を決定しました。

第一期のリバネス奨学金には114名の応募があり、37名の熱意に溢れる学生を採択しました。現在は採択者向けのゼミを開始し、奨学生も動き出しています。ゼミはリバネスの代表陣がゼミ長となり、アントレプレナーから直接のアドバイスが受けられます。奨学生には入社を全く義務付けてはいませんが、リバネスではアントレプレナー採用を2021年から開始しており、将来入社する奨学生が現れることを大いに期待しています。だからこそ、自社の経営陣の育成相当の待遇で奨学生へのアドバイスに当たっています。

即座に感じた手応え

募集、審査、ゼミを開催したことで、リバネス社内への刺激がたちどころに現れました。リバネスの理念に共感しつつ、それぞれ自身の活動方針を持つ学生が集まったことで、社員が奨学生に感化され、プロジェクトに巻き込まれる流れが生まれています。社員はメンターとして奨学生と対峙しながらも、奨学生の行動力やビジョンに影響され、より積極的に活動するようになったのです。もし新規事業

案40件程度を得て、さらに社員のアントレプレナーシップ向上を目指した研修を行おうとすれば、本来は長い時間と大きな資金が必要になるでしょう。それと比較して、リバネス奨学金を実施したことによる社内の変革は驚くほどの少額投資で実現できたこととなります。

日本学生支援機構が年間に貸与している奨学金は約9931億円。そのわずかに0.001%でも、学生の活動を後押しするために使われれば、日本の多くの学生が活動を始め、アントレプレナーシップを発揮出来るようになり、社会は一変するはず。未来のリーダーと共に成長するパートナーと共に、この変化の激しい時代の波を乗り越え次の世界を作っていくことを願っています。

新しい奨学金のしくみをつくる、企業パートナーを募集しています

[問い合わせ先] 株式会社リバネス 重永 hd@lnest.jp

L UNIV. Leave a Nest University

